

「国語の力」の成立過程 X

——国語教育学説史研究——

野地潤家

一三

「国語の力」の第四章 文の律動 に収められている、一心の律動 には、つぎのような挿話が引かれている。

「永平の突堂和尚、ある朝、殷々と響く晝鐘に心耳を澄まして、禪定から起って侍侍を召して、『今鐘を撞いて居るのは誰れか見てまいれ』と命ぜられた。間もなく侍僧は鐘楼から帰って、それは新参の一小沙弥であることを申上げた。突堂は彼を膝下に招きて『今晝の鐘はいかなる心もちで撞いたか』と尋ねられた。沙弥は『別にこれという心得もござりませぬ……』と答えると『いやそうであるまい。何か心に思つて居たであらう。鐘つかばかくこそ。誠に尊い響であったぞ』といわれて『それでは申上げますが、国許の師匠が常に『鐘撞かばそれに副う心の慎みを忘れてはならぬ』と戒められました。今朝もその教えを思い出しまして、礼拝して鐘を撞いて居りました』と答えると、突堂和尚はしみじみとその心がけを賞め、『終生万事に処して今朝の心を忘るなよ』とさとされた。朝ごと夕

ごとに慣れて撞く鐘の一韻にさえかほどまで敬虔の念をこめた悟由禪師の話(茶味)を我が友より聴きし後、いくたび折にふれてはそれを人に伝えたかも知れぬ。鐘の一韻にさえ心の奥の響きを聴取った突堂和尚の心境がしみじみと尊く思われる。又利休が秀吉の小田原陣に随行した折のこと、一日茶会を催せとの沙汰であったが、陣中のことゝて何のしつらいをすることもできないから、せめてと竹林に分け入りて花入れを切る折しも、夕の鐘の音が響いて来るのを聴きて、刀を取り直して竹竿に刻んだ刀痕から、その花入れが鐘の音という名器として伝えられるよしを聞いて居たが、一日さる処にてその花入と並らべて、松浦侯の手ずからそれを摸作せられし竹筒の上に、その刀痕につゆたがわぬ鐘の音の形の味いを見た時の悦びを今に忘るゝことができぬ。

文を読みて一語の意味を求むる時、よくこれ等の話を想い出した。また幾たびか人に話したことでもあった。今亦この話を憶い出してこれを記すは、心の律動を聴き取る心耳の作用を語るに際して、この話を考えることから、心が急に判然とすることを覚えるか

らである。」(有朋堂版「國語の力」、一七六一—一七七七)

文章の律動をとらえ、聴きとるには、どうすべきかを論及するにあたって、垣内松三先生は、まず、心の律動を聴き取る心耳の作用に触れて、奕堂和尚や利休の話を、第四章の冒頭に握えられた。

二つの話のうち、前半の奕堂・悟由禪師のそれについては、話の出所が、(茶味)として示されている。「茶味」は、成蹊女学校の庭隅に建てられた茶室——不言庵の庵主であった、成蹊女学校主事奥田正造氏がまとめられたもので、大正九年(一九二〇)五月一〇日に初版が出された。のち、昭和一六年(一九四一)十一月三日には、改版、縮刷版が光成館書店から刊行された。縮刷版には、「茶味」のほか、昭和一五年(一九四〇)七月四日、文部省教学局編、日本精神叢書二十七としてまとめられた、「炬辺閑想」も、附録として収録されていた。)

「茶味」は、つぎの二二章から構成されていた。

- 一 序 話
- 二 茶道の由来
- 三 茶道の真諦
- 四 かすかなる感じ
- 五 自己の姿
- 六 自然の趣
- 七 所作と言葉
- 八 器
- 九 水屋の働き
- 一〇 茶 境
- 一一 無碍自在

三 真の生活

これらのうち、二二章の末尾には、大正八年十二月八日晧と脱稿の日時が記されている。

さて、前掲悟由禪師の話は「茶味」の四 かすかなる感じ に收められていた。そしてそれは、つぎのように位置づけられていた。

「(前略)これ等の禪の背景として、終始一貫するものは釜の湯の煮える音である。通常之を松風というている。この松風は楽音と違ひ、旋律の影響を受けていないので、静寂の興趣を一層深からしめ、落ちついて聞いていると、心を大森林の奥大幽谷の庭まで持つて行ってしまうような心地がする。太古の如き静けさの内に、その幽趣を増すのは、松韻と鐘聲とである。之を四疊半裡にうつしてこの趣を偲ばしむるは実に茶境の力である。

かく心耳をすましましたれば、微かなる感じは微かなる感じではなくなつて来る。その微かなる感じのあなたに統ける、大きな重き意義の世界が開かれてくる。經に『観其音声皆得解脱』くわんごんじやうがいつくげだつといふ所謂観音の妙境とは即ち是である。

一日奕堂和尚は股々とひびく鐘に心耳をすまし、禪定から起つて侍僧を召し、鐘つく者の誰なるかを見せしめた。侍僧はそれが新參の一小沙弥である旨を返り報じた。そこで奕堂和尚は之を膝下に招いて、『今晧の鐘は如何なる心持でついたか』と尋ねられた。沙弥は『別にこれという心持もなく只鐘をついたばかりであります』と答えたので、『いやそうではあるまい、何か心に思っていたであらう。鐘つかばかくこそ、誠に貴い鐘であつたぞ』といわれて、『別にこれという心得も候わねど、只因許の師匠が鐘つかば鐘を仏と心得て、それに添う丈の心の慎みを忘れてはならぬと、常々戒めて下

されたことを思い浮べて、鐘を仏と敬い、礼拝しつゝついたばかりでございませう」と答えた。奕堂和尚はしみじみとその心掛けを賞し、『終生万事に処して今朝の心を忘るなよ』と戒められた。この小沙弥こそは後年の森田悟由大禪師であった。朝毎に夕毎に慣れて撞く鐘の一韻にさえ、斯ほどまで敬虔の念いを罩めた古人の心づかいは、いかにいみじきものではないか。

已に昔によって心がすみ渡って来ると、心の窓である眼には真の趣がうつる。晝の露地では幽かなる残燈が心を照らす。残燈に心づけてよと教えられているのは、露地に配合せられたその光の工合であつて、油皿の置き方や、油の残り加減ではない。秀吉が晝の会に招かれて、露地に入った時、その侍臣を顧みて『あの残燈はいかに』というた。侍臣は燈火かゝげよという思召とあやまって、火の加減を変えた。之を見た秀吉は『はや残燈の趣失せにけり』と嗟嘆した。悲しいかな侍臣の心の眼が暗かつたのである。(後略) (縮刷版「茶味」、一七七一―一九八)

右の述べ方と照らしてみれば、垣内先生が「国語の力」に引用されたのは、「茶味」の原文そのままではなく、みずから手を加えられていたものであることがわかる。「茶味」に見られる奥田正造氏の文章は、ひきしまつて力強く、おのずと一種の格調を具えていた。引用にあつたつて、垣内先生は、ご自身の立場から、「茶味」の叙述を採り用いるのに、多少の取捨選択をもなされたのである。根幹を「茶味」の本文に求めつつ、なお緊縮したものとして、引用されている。

たとえば、「鐘つく者の誰なるかを見せしめた。「(「茶味」) ↓「今鐘を撞いて居るのは誰れか見てまいれ」と命ぜられた」

(「国語の力」)には、垣内先生による的確な具象化が見られる。また、「この小沙弥こそは後年の森田悟由大禪師であった。朝毎に夕毎に慣れて撞く鐘の一韻にさえ、斯ほどまで敬虔の念いを罩めた古人の心づかいは、いかにいみじきものではないか。」(「茶味」) ↓「朝ごと夕ごとに慣れて撞く鐘の一韻にさえかほども敬虔の念をこめた悟由禪師の話(茶味)を我が友より聴きし後、」(「国語の力」)には「茶味」の二文を一文にまとめて、さりげなくつないでいく手法がとられている。こうした点に、垣内先生の自在な引用、採用法を見る。

ただ、「別にこれという心得も候わねど、只国許の師匠が鐘つかば鐘を仏と心得て、それに添う丈の心の慎みを忘れてはならぬと、常々戒めて下されたことを思い浮べて、鐘を仏と敬い、礼拝しつゝついたばかりでございませう」と答えた。」(「茶味」) ↓「『それでは申上げますが、国許の師匠が常に『鐘撞かばそれに副う心の慎みを忘れてはならぬ』と戒められました。今朝もその教えを思い出しまして、礼拝して鐘を撞いて居りました』と答えると、」(「国語の力」)になると「国語の力」では、「鐘を仏と心得て」・「鐘を仏と敬い」などが保留されていて、それだけ両者の間にちがいが見られる。省略されているだけ「国語の力」にある、「それに副う心の慎みを忘れてはならぬ」の「それ」がなにを受けるかは、あいまいになつてしまつておそれがある。

「茶味」においては「かすかなる感じ」——茶境の悟得について述べつつ、悟由禪師の話が説かれていた。「国語の力」においては、この話を出発点として、心の律動を聴き取る心耳の作用を説こうとされているのである。両者、話の位置づけにはちがいが見られる。

森田悟由禅師・奕堂和尚の話が、垣内先生に好ましいものとして

認められ、さらには氣に入られて、「いくたび折にふれてはそれ人を伝えたかも知れぬ。」とされてゐるのを見れば、これは垣内先生の胸底に刻まれ、たえずあたためられていたことと思われる。

心耳の作用・心耳の鋭さを語る典型的な話に、文章の内面・律動をさぐっていく拠点の一つを見いだされてゐるのは、垣内先生の心法を示すものである。その心法は、垣内先生の「国語の力」を貫く方法ともなつていた。

つぎに、同じく「国語の力」第四章 文の律動 には、一二 歌の形 の節において、左のように述べられている。

「又、

花をのみめづらん人に山里の雪間の春を見せばや

南坊録に『これ又相加へて心すべし。世上の人々その山かしの森の花はいつく咲くべきかと明暮外に索めて、彼の花紅葉も我心にあることを知らず、たゞ目に見せる色ばかりを楽む也。山里は浦のとまやも同前のさび住居なり。去年一とせの花も紅葉もことくく雪が埋みつくして何もなき山里になりて浦の苫屋と同意なり。さて又かの無一物の所よりおのずから盛りを催すやうに埋み尽くしたる雪の下より陽氣をむかへ、雪間のところくくいかにも青やかなる草がほつくと二葉三葉萌え出たるとく力を加へず、真なる所のある道理にとられし也』と記せるは茶道の真諦をこの歌によりて説いたのであるが、この歌の読方も、この外にはあるまいと思ふ。即ち

(4) 花をのみめづらん人に 2 1 2 · 2 2 2 1

山里の

2 2 1

雪間の春を見せばや 2 2 2 1 · 2 1 2 2

の如く行を分ち、停音及び音調を味う時に趣の深い歌の心がしみくく味われるように思う。」(有朋堂版「国語の力」、二〇二・二〇三、傍線は引用者。)

「国語の力」の一二、歌の形 においては、右の(4)の歌のほか、

(1) ひんがしの

野に・かぎろひの・たつ見えて

かえり見すれば・月傾きぬ

(2) 袖ひちて・結びし水の・氷れるを

春立つ今日の

風や・解くらむ

(3) 春日野の・若菜摘みにや

白妙の

袖ふりはへて・人のゆくらむ

などが挙げられている。四首のうち、(4)花をのみめづらん人にの歌に、「南坊録」からの引用をして、ていねいに説かれてゐるのには、これが、「万葉集」(1)・「古今集」(2)・(3)に対して、「新古今」からの抽出であることのほか、特別のわけがあったようである。

すなわち、垣内先生の処女作「石叫ばむ」(大正8年7月8日、不老閣書房刊)所収の「草の春」の第一章には、右の歌に関して、つぎのように説かれていた。

「1

花をのみめづらん人に、

山里の、
雪間の草の春を見せばや。

『紹鷗わび茶の湯の心は新古今集の中の定家朝臣の歌に見わたせば花も紅葉もなかりけり
うらのとまやの秋の夕ぐれ』

この歌の心にてこそあれと申されしとなり。花紅葉は書院台子の結構にたとへたり。その花紅葉をつくくとながめ来りて見れば無一物の境界浦のとまやなり。花紅葉を知らぬ人の初よりとまやには生まれぬぞ。ながめくくてこそとまやの寂ひすましたところは目立つなれ。これ茶の本心なりといはれしなり。又宗易今一首見出したりとて常に二首を書きつけ誦せられしなり。同集家隆の歌に

花をのみ待つらん人に山里の

ゆき間の草の春を見せばや

これまた相加へて得心すべし。世上の人々その山かしこの森の花はいつく咲くべきかとあけ森外にもとめて、彼の花紅葉も我が心にあることを知らず、たゞ目に見せる色ばかりを楽むなり。山里は浦の管屋も目前のさひ住居なり。去年一とせの花も紅葉もことくく雪が埋みつくして何もなき山里になりて寂びすましたるまでは浦の管屋と同意なり。さて又かの無一物のところより自ら盛りをもよふすやうなる所作が、天然とはづれづれに、あるはうつみ尽したる雪の春になりて陽気をむかへ雪間のところくくにいかにも青やかなる草がほつくと二葉三葉萌え出たる如く力を加へず真なるところのある道理にとられしなり。歌道の心は仔細もあるべけれど、この両首は紹鷗利休茶の道にとり用ひらるゝ心入を聞き覚えて

記し置くなり。かやうに道に心ざし深くさまゝの上にて得道ありしこと愚僧等が及ぶべきにあらず。』(南方録)

この歌を三行に分けて記したのは『南坊録』の叙述に拠るのである。しかしこの叙述に拠りてこの詩形を掲げたのは、宗易の心に映じたる歌の姿を形に現わそうとするためではない。それよりもこの歌の心を止揚して彼の体験を鮮明に表象した道の姿をさながら形に顯わして見たためである。

この歌の三の行の韻脚に位置せる三の小さな音に、の、ば、や、を心の中に響かして静に内聴すればする程、これ等の小さい音の長く細く連る線の中から、恰かも白金の線を弾ずるように清冽な光を伴う微妙な音波が振動して宗易の心の律動が音楽的節奏を以て我々の心をつつのである。

『花をのみ待つらん人に』この句を低誦した宗易の心には、花や草の姿でもなく、花や草で象徴された観念でもなく、きっと花盛りのような紅葉の輝くような豪華な華麗な生活の光景が見えたことであろう。この浮薄な放縱な耽溺の生活に対する反感も伴生したことであろう。それよりもっとよく聞きとりたいたいののは微妙に織り込まれて居る内省の心である。浅はかな人の世浅ましい業のはかなさに堪えがたい魂の悲みと苦しみの錯綜せる呻きも微かに聞きとれるような感じがする。この音波が糸のように細りて、しかもなお顔えて居る音像からうら寂しい山里の姿が醜穢と浮んで来る。竹扉を開きして炊煙も稀れな佗びしい茅舎の姿も見えて来る。二たび三たび『山里の』と唱いすました宗易の心律を自分の心の中に生かして聞けば、この小さな音を介して宗易の心の中に広がって来る山里の光

景がだん／＼明になって来る形が見える。何という偉大な言語の力であるう。ちょうどチェロの名手が胸を張り腕を伸し毛髪の間まで全一の力に頼えながら長く細く強く引く絃の音に、余韻に、この世ならぬ幽渺の境に導かるゝような、持続的な透明な旋律さえ想い浮べられる。この音律をたどれば宗易の心の中に画かれた冬枯れのまゝの野のあちこちに低い陋い茅舎が仰向うように散在して居る姿さえ画のように鮮やかに映して来る。無限を撞撃する予言者的な創造の精神さえ顕われて来る。

突然、旋律は昂揚し緊張し激越して『雪。間。の。草。の。春。を。見。せ。ば。』に至って宗易の心の中に画かれた春の光に融け行く残雪の間から浅背に彩る山野の光景が明に見えて来る。この一寸の青みに甦った天地の力が籠れるを見よと真摯なる驚異に戦慄せる心臓の呼動も聞きとれるように思う。浮華眩耀なる文明の熱病に悩めるものに清澄な芳烈な豊醇な靈泉の一滴を与えんとする至誠も感ぜられるではないか。敬虔なる宗啓が『かやうに道に心さし深くさま／＼の上にて得道ありしこと、愚僧等が及ぶべきにあらず。まことに尊ぶべくありがたく云々』と讃嘆したのは、真にこの心境に対する崇敬の念の迸り出たものであらねばならぬ。まことや一の事に透徹すれば万の事は曉れるのである。師の道陳から介せられて紹鷗の庵に参じた時に露地の落葉に閃めいた尖鋭な神経の力は百鍛千鍊せられて、微かな音にも些かの動きにもその奥底に透徹する睿智と生い立ったのである。家隆の歌を誦して浮んで来たのは家隆の心ではない。この語の刀を以て浮彫にした彼の道の姿であった。個性の奥底まで開鑿した時に全ての個性と連る人性を洞見した彼は、水を汲み炭を注ぐ様なさ／＼やかな行事をも人性の内面から照らす光を以て浄化せんとした

のは当然であろう。しかも隱遁者の様にたゞ美化し靈化して独善享楽の境に泥んだゞけではない。僧宗啓を門下に見出すに到って彼れはこれを聖化して宣伝せんとする境地にまで達したのである。最も低いために最も広い人の世を背景とした彼は最も大い道を見出してこれを世の人に指す人となった。『一般を普く遍に高め、普遍を一般に広めて、人の世を豊かにせんと祈る人ともなった。彼の終りは全ての殉教者の伝記のように悲惨なる暗黒に包まれて居る。併しながら彼の真実の精神から生れた形相は、神経から行動に、行動から神経に伝わりて、今に躍動して居る。偉大なる新生の力に驚異と歡喜と讃嘆の叫びを発するものは、林に歌い空に舞うものゝみではない。宗啓が帰依・渴仰・法悦の声はこの道に参する万人の歡呼であらねばならぬ。』(「石叫ばむ」四五―五二頁、副点は垣内先生) (なお、右に引用した部分は、そのまま、「笹の庭」―隨想集―昭和29年8月25日、垣内先生著作刊行會編、光村圖書発売Vに、収められている。)

これによれば、「国語の力」に引用された、「花をのみ、めづらん人に」の歌については、すでに「石叫ばむ」において、くわしく考察されていたことがわかる。それは、垣内松三先生の「南坊録」理解の深さから導かれていたことであつた。南坊宗啓(千利休の高弟)の著にかかる「南坊録」九卷は、利休(宗易)から親しく見聞し習得した茶の湯の心得を記したものである。この「南坊録」に垣内先生は、国民生活史研究の立場から真剣にとり組んでいられた。「石叫ばむ」に周到に考察されたところを踏まえて「国語の力」へ採られたのであつた。「国語の力」に採るにあたっては「南坊録」からの引用範圍が狭められているほか、「又かの無一物のところより自ら盛りをもよふすやうなる所作が、天然とはづれん」に、あるは

うつみ尽したる雪の春になりて陽氣をむかへ」のところなど、「國語の力」においては、傍線部は省かれ、「……おのずから盛りを催すやうに埋み尽くしたる雪の下より陽氣をむかへ、」となつてゐる。もつとも、右の傍線部は、「南坊録」には、「扱又彼無一物の所より自ら盛を催す様な所作の天然と端端にあるハ埋つくしたる雪の春になりて陽氣をむかへ」（「南坊録」巻一、一五ウー一六オ）となつてゐる。「國語の力」への引用に際して、ある種の取捨が見られるのは、やはり意図してのことであつたかと推察される。

「國語の力」に、「南坊録」からの引用を受けて、「と記せるは茶道の真諦をこの歌によりて説いたのであるが、この歌の読方も、この外にはあるまいと思ふ。」（同上「國語の力」二〇三ペ）とあるのも、「石叫ばむ」における考察が裏づけとなつてゐることは、こゝにいうまでもない。

一見淡々と無造作に引かれてゐるかに思われる例歌についても、垣内先生独自の深く鋭くはげしい解釈・考究のなされていたことを認めないではいられない。――垣内先生にあつては、文章の律動をとらえることを、口先で唱導されていたのではなかつた。

つぎに、「國語の力」の第五章 国文学の体系 においては、その二一が、再び「読む力」に就いて となつていて、以下のようにまとめられてゐる。

「判断の統一を求むる方法的準備の終ると共に、茲に再び当初よりの問題であつた『読むこと』に還る機会を得た。更に『読むこと』に就いてこれまで述べたところをこの方面から總括して結論に導きたいと思ふ。」

これまで対象の統一に於て取扱つた『読みもの』は純文学に限られたのであるが、読む作用は素よりそれに限られたのではない。科学・哲学の論文又は典故等も亦読む作用の対象であることは勿論である。唯、文学の立場に於てはそれ等を素材として取扱うことができるのであり、『國語』に於て純粋なる表現形式としての文学を主なる対象とするために、自ら純文学に逼することにならねばならなかつたのである。併しながら「読む作用」に就いて考へる時に、特に文学の一面にのみ偏することは、専門家の選ぶ方向であつて、一般的なる『読むこと』は野を走る水のように、その赴くまゝに文化の分野の各方面に向うのであるから、その領域を局限することなく、できるだけ文化意識の各要素の結晶である読みものを説破して、經驗を多様にすると同時に其の統一を求めて、自己を確立し修正し充實する精神を生かす作用であらしめねばならぬ。

若干の愛読の書を所有して常に照心の光を心の前にかゝげることが『読むこと』の極致である。（事務的な『読むこと』に就いてはいうまでもない）。併しながらさうした『読むこと』に於ても、『読むこと』はそれにも追従するものでなくして、それを乗り越して自己の中に自己を創造する営みでなければならぬ。この要求から自己の確立を『読むこと』の第一着手として又その終りとも見るのである。前に幾度か、眼の着けどころと心の据え方に言及したのは説方の態度に關してその基礎づけの願望を求めたのであつて、その立場から無限に進展して已まない創造的作用が『読むこと』の本質である。説方はそれを自己の放恣に打任せずに方法的に嚴肅化することであつて、説方・解釈・批評のいかなる学説も考察も、この問題を生かしてくるものでないならば無用の思弁に過ぎないであら

う。この地点まで到達するために、これまで説方の心理的研究又は批評主義論の所説をも顧みねばならなかつたのであるが、感覺的要素や表象や臆断の上に立つた学説の如きはこゝに至りて消え去らねばならぬのである。利休が或人の茶秘事を問へるに答えて『茶は服のよきやうに、炭は湯のわくやうに、花はその花のやうにいけ、夏は涼しく冬は暖にする外秘事はない』と謂つた。その人不興して『それは誰も合点の前のこと』という。休重ねて『合点の前ならばそのごとくして見たまへ、我等は門弟子にならう』といえるを、笑嶺和尚がその座にありて、これを聞いて『休の答へ至極せり』と挨拶せられた。『読むこと』も亦『読むこと』の外何物もないといえるのであらう。笑嶺和尚の語の中に『三歳の童もこれを知りて八十の茶人もこれを行ふこと克ばざるべし』と謂つてあるのも面白い。白居易が鳥窠禪師を訪ねた時、例の如く樹上に坐禅して、ゆる／＼と居睡りをして居る。『和尚々々危いではないか』と驚かすと、禪師は『そんな処に立つて大丈夫だと思つて居るお前の方がもつと危い』と喝せられたことも想ひ起される。誰でもよく心得て居る『読む』ということをして、その作用の本質に於て考へることなく、表面的な觀察を根拠と信じて、それを論難・分析・説明し、その上から建てられた学説を確実な根拠と想つて居るものは亦、鳥窠禪師の一棒を喫せねばなるまい。読むことを確実に基礎づけるものは、自己の心の握え方と眼の着け方である。心の握え方は学説から学説に漂泊するぐらぐらした心の置き処から生ずるのではなくして、唯眞実の自己を求むる要求に於てのみ得らるゝのであり、其視点よりのみ目標が展望せらるゝのである。ペーターが、環境の研究の終つたところから批評が始まるといつたのもこのことをいふのであらう。こ

れを外に求めないで内に内にと選つて求むる内面的統一の根柢に、動かざる心の立ち処を選定して、その立場から無限の世界を展望することであらねばならぬ。我々が『読むこと』に就いて感ずる稽異は、かくの如き作用の作用の上に關るのであって、読方・解釈・批評の問題は、文化意識の中心点に立ちて、自己の奥より産出する探求の精神の方法的根柢を求むることに在るといわねばならぬ。唯こゝに附言しなければならぬことは、不軽が己れを罵るものをさきえ礼拝したように、いろ／＼の立場から行われる研究を尊重し、これを撰取し克服し合一して、一々に生命を与えなければならぬ。要はそれ等の研究の帰結を転回して、もつと根本的な統一に總括することであつて、決してそれを蔑むことではなく、それを生かして基礎を確実にするのであらねばならぬ。できるだけそれ等の研究を綜合し統一して、もつと嚴肅なる目的のために勢を加えるものたらしめねばならぬ。

『読むこと』を、常に謙虚にして嚴肅なる求道の精神に充ちたものであらしめることは、自己の自律・理念の制約に依りてのみ可能である。利久の茶談に因みて、集雲庵の露地門頭の七則を挿みて、その解説に代えたいと思ふ。

- 一 賓客腰掛に來り同道の人相揃はば板を打て案内を報ずべし
- 一 手水の事専ら心頭をすゞを以てこの道の肝要とす
- 一 庵主出詣して客庵に入るべし庵主貧にして茶飯の道具偶はず美味も亦無し露地の樹石天然の趣其心を得ざる輩はこれより速かに帰り去れ

一 沸湯松風に及び鐘声到らば客再來湯相火相の差となること多罪

一 庵内庵外に於て世事の雑談古來これを禁す

一 賓主歴然の会巧言令色入るべからず

一 一の始終二時に過ぐべからず但、法話法談に時うつらば別外

(南坊録)

露地門頭にしてかくの如く開示し、歩々悠然として大道に踏み到

らしめんとする深い用意は、『説むこと』の門頭に於ても掲ぐべき

至極の銘であると思う。読みものを選択する自己も、説方に於て主

張する自己も、目前の自己ではなく、自己の内面に於て自己を否定

し、自己を操撕し、断乎としてそれを決定し宣言することのできる

自己であらねばならぬ。『説むこと』は何人も知り何人も行うこと

であるが、無限に向上して已まない自己を説む自己に想い到らば、

新たに『説むこと』に就いての驚異を感ぜずには居られないであろう。

無用の思弁に心散れる自己の心頭に冷水を灑ぎて、澄み切った

心の中より輝く光に説むものを照らして、それを讀まねばならぬ。

この立場から見ると、説方教授の問題も特に多くの言を用いるこ

とを要しない。茲に二たび『賓主歴然の会、巧言令色入るべから

ず』を録してそれに換えたいと思う。』(有朋堂版「国語の力」、

二七九―二八五頁、傍線は、引用者。)

「説むこと」について、まとめをしていく緊要な項に、傍線を施

した二つ——利休の茶談ならびに「集雲庵」の露地門頭七則が引用

されているのは、注目すべきことである。二つながら、垣内松三先

生の胸裡にたえず生きていたものと推察される。

垣内先生は、「説むこと」に關し、「若干の愛説の書を所有し

て常に照心の光を心の前にかゝげることには『説むこと』の極致であ

る。』(「国語の力」、二八〇頁)とされ、また、「説むことを確

実に基礎づけるものは、自己の心の握え方と眼の着け方である。』
(同上書、二八二頁)と述べ、「『説むこと』も亦『説むこと』の
外何物もないといえるのであろう。」(同上書、二八二頁)と述べ
られた。この間に、利休の茶談が引用され、生かされているのであ
る。

さて、右の利休の茶談は、垣内先生著「石叫ばむ」所収、「草の
春」にも、すでにつきのように引かれていた。

「最も低いために最も広く、最も広いために最も大なる頂の上に
足を踏み入れた宗易の茶道は、力を用いずして真なる所作を精練す
ることを主眼とした。力を用いるというのは巧慧なる作為をいうの
である。水晶のように透徹せる人格の内面より自然に輝き出する
はたらきを以て凡ての所作を統率して、はたらきと所作との間に髪

一筋の隙間もない境地が彼の目ざすところであった。——
或る人、爐と風爐、夏冬茶の湯心持極意を問へるに

『夏はいかに涼しきやう冬はいかにあたたかなるやうに、炭
は湯のわくやうに茶は服のよきやうにこれにて秘事はすみ候』
と答へるとその人不興な面もちで

『それは誰れも合点の前にて候』
と不興の様子であるので、宗易は重ねて

『さあらば右の心にかなうやうにして御聲せよ。宗易客にまゐり
御弟子になるべし』

といふ。その座に笑嶺和尚が居て『宗易が申さるやう、至極せり。
かの諸悪真作衆善奉行と鳥糞の答へられたる同然なり』と讃せられ

た。

又、こういう話も伝えられて居る——

『小島屋道察に真壺を求められしにその頃沙汰あるほど見事の壺にて人々見物の所望ありしに名もなき壺師ることいかゞとて卑下して出されず、ある時客衆常の会の約束にて参られ腰かけにて人を以て今日我等まること第一壺一覽大望ゆえなり。御壺師られず候はゞ入るまじき由申し入れらる。道察提なく諦り上りの脇の方に口覆はかりして転はし置きて迎に出てられたり。客くゝりを開きて見るに脇に壺を転がし置きたり。床へ御師り候へと申し入れしに道察出て重ね々御所望故出しては候へども床へ上げ申す壺にても候はずせて御通りかけにと存じ捨て置候。其のまゝに御覽候へとの挨拶なり。然れども幾度も断りて竟に一覽の後床に離られしとなり。この壺すなはち小島屋の時雨と後には名を得たり。この所作を人々感じ捨壺とてはやしたることなり。宗易いはく尤も時にとりてはさやうのはたらきあるべきことなれども唯、所望の上壺を出すほどならば床にかざりたらんはおとなしき所作なるべし。捨壺むづかしきことなり。勿論又真似などすべきことにあらず。』

又宗啓、客亭主葉の心もちいかやうに得心して然るべきやと問へるに答へて

『いかに、も、葉の心にかなふがよし。然れどもかなひたがるはあし、得道の客亭主なれば自ら心よきものなり。未練の人葉の心になうとのみすれば一歩道にちがへばとも、にあやまちするなり。さればこそかなうはよし、かなひたかるはあし。』

(中略)

もし『生活』という概念に含める雑多の觀念の中から、何人も偏しぬい生活に必要な物資、生活を規律する制度の上のみ実質的に着眼せずして、物資を利用してその能率を生活に高める精神力の

躍動を尊重するならば、宗易の仕事はそれに最も近いものであった。即ち最も低い最も劣れる物資をも、最も清く、最も美はしく、高く生かす力の精練であった。彼の仕事の中心は茶道である。しかも一椀の茶を喫する為には、その全ての環象を攝するが故に、建築工芸美術作法のことに至るまで彼の工夫したことは国民生活の様式に異彩を与ふるものとなった。されば日本国民の最小生活の研究として、生活の単位の創見者として見る時、利休よりも宗易よりも千の與四郎の名にもっと親しみを感ずるのである。千の與四郎の名に於て、彼の茶道を技術的となつた流派の茶に連る聯想から峻別すると共に、浪華江戸の町人生活に連る彼の事業の上に、国民生活史上に於ける歴史的位位置を要求せねばならぬ。」「(「石叫ばむ」、五二―五八べ、圈点は垣内先生。)

垣内松三先生は、「石叫ばむ」における、右の記述によつて、利休の茶道の至極のところを、すでに把握していられた。「南坊録」からの引用をしつつ、利休(千の與四郎)が到達し得たところが的確にとらえられていた。とりわけ、「(前略)彼の工夫したことは国民生活の様式に異彩を与ふるものとなった。されば日本国民の最小生活の研究として、生活の単位の創見者として見る時、利休よりも宗易よりも千の與四郎の名にもっと親しみを感ずるのである」(「石叫ばむ」、五八べ)とあるのは、鋭い指摘であった。

「國語の力」に、利休の右の茶談を引用するにあたっては、「南坊録」そのままの文語体ではなく、ほぼ口語体に改められ、さらに話を追加してふくらませていかれた。そこに、垣内先生のくふうを見ることができる。

さて、「国語の力」には、前掲利林の茶談に因みて、「集雲庵」の露地門頭七則が掲げられていた。草庵のありかたについて、垣内先生は、はやくから関心を示された。「石叫ばむ」においても、つきのように述べられているのである。

「宗易が堺に草茨の小庵を結むだ時に、庵は海に臨みて絶好の風光を一時の中に斂め得る如きまことによい位置に立て居た。然るに彼は木立によって海を遮りて、僅かに手洗の石に蹲まりて顧る時、木の間から蒼海を望み得るように樹を植え込んだ。

この意匠は宗祇の

『海すこしいづみに見ゆる木の間かな』

の句より得たものと伝えられて居る。もとより彼が家隆の歌に悟ったように、宗祇の句が彼の直観を具象化する有力なる契機であったことは推想するに難くはない。しかしながらこの樹の植え方を思いついたのは、海に庄せられる勢を倒して、海を鎮する力を作る宗易のはたらきであったと思うのである。誠に海に対する庵の光景を想像せよ。『多』より『一』を確立し『一』より『多』を撰取する精神を形の上に鮮やかに見て取ることができるとはあるまいか。

これはもとより一の例に過ぎぬ。しかしながら『一』を『多』より確立して『多』を撰取せんとする態度は彼の一々の工夫に一一に生きて居る。この精神は東山時代より桃山時代に推移する文明に遍在する特性ともいへべく政治武術建築能楽絵画庭園等に現われたる天才の特性とも共通するものであるが、特に私生活の上に於けるこの精神の顕現は稀有のことである。彼の明敏なる感性と鋭利なる判断は、ものゝ真髓を捉えてその核心に触れねばやまぬ意志を生かして、彼の眼を単位に注かしめたのであらう。叙述の便宜上草庵の構造から更にその態度の例証を挙げて見よう。

彼の草庵は草茨の小舎の佻びしさをさながら移せるさゝやかなものであった。床・棚を具えた三間四面の書院の形をこゝに見るまでいかにも長い労苦の跡がたゞ談合の二字によって伝えられる。三間四面の書院の一部を囲える圍いを数寄屋に移し、数寄屋に山里の静寂を加え、更に草庵の佻びを添えた工夫の累積を、床に棚に窓に障子に読めば読むほど明敏なる感性と透徹せる批判の偉力に驚かざるを得ぬ。彼の草庵は三間四面の書院を四分して其の一に当る小室とこれに隣る一の水屋とより成る。この国土に営まれた住宅のあらゆる様式を一にして、しかもこれを太古以来統けて来た齋屋の中に打ち入れた最小単位をこゝに見るのである。彼は更に正方形に於ては二畳、長方形に於ては三畳一畳の小室をさへ試み、畳の目一つに基準を置くまでに徹見した。この基準を展開して畳の目五と六との配合を考え、五と六とを規矩として全ての物の位置を規律し、その単調をひずみを以て複雑にし、直角対角の全ての線の中心を室の中央の半畳の約四分の一なる柄辺に漢めて和敬清寂の核心を打成したのである。彼の工夫は一として空想から出ずるものでない。——現今の家事教育は、仮設的收入額を家計の標準に立て、あるから、その論理の展開も実質も畢竟虚妄である——彼はすべてこの核心を中心として所作とはたらきとを内省して行動の精神を精練したのである。

一の重心を以て全てのものを靜かに調整する行動の原則はどこまでも展開し得る性質を帯びて居る。ある時宗易は宗啓に台子の伝えをするに際してこの心持にて二畳でも千畳敷でも同じようにせよとも教えた。野外の柴火茶会にも同じ心を伸べようと試みた。狭く寂びた露地の趣きは須安の好みでは露地の細徑から山路に連りて一里も先の山の巔に達するようになった。山嶺からはどこまでも見

暗らしたことであろう。当時の好尚が多と一と一と多との連りから

『一』を示現するにあつたことは個人の上に社会の上によく現われ居るのであるが、僅かの語と形とに依つて伝えられて居る彼の精神もこの『一』にあつたであらう。このことは懷石の上にも年中行事の上にも同じ工夫の跡が見られるのである。懷石の工夫を禪苑の赴粥飯法に依りて更に簡単に静爾に優雅に民家の日常生活に結び付けた態度の如き、有職の方から探つて来た年中行事の豊なる趣味を一輪の花や一茎の草を以て象徴したる工夫の如き、故実から得たる床飾り棚飾り等を朴素的に草庵に調和せしめたる慎慮の如き、一々此精神を物語るものでないものはない。唯、彼は多くを語らず、宗啓の伝ふところも茶室に客として見聞せしところに止まる。故に水屋に於けるは、たゞの如きは最も知らんと欲するところであつて、併かもこれを知るを得ないのは遺憾であるが、利休好みの水屋の構造から考へて見ても其の所作が時間と労力とを省きて最も高い能率を有するものたりしは疑を入れぬ。恐らくは『典座教訓』に依つてこれを更に工夫したものであらうといふことは類推に難くない。若し此の見方に大なる誤りがないとしたら、彼の仕事は職業という問題との連りを除くの外、日常生活の全般に亘りて常にその原理を考へて居るといつてよいのである。もし有職及び故実の精神が國民生活を豊麗にしたといひ得るならば、彼はそれを一括して更に小さくし深くしたといつてよい。単位は単位よりも小さきもの又それよりも内を見るものであつてはならない。彼の見たる単位は當時に於ける最小なる経済的個性、純真なる道德的個性の上に打建てたる個のものに到達して居る。この上に立ちて更に内面的に、力を用いずして真なる所作を工夫した態度と創見は実生活上の行動の哲学とい

つてもよいのである。

現代生活は實質的には複雑なる社会關係の上に立つものであるが、少くとも研究の方法及び教育に於ては低級なる啓蒙的態度を離れて先ず合理的なる『一』の確立から出発せねばならぬ。」（「石叫ばむ」、六〇―六六頁）

②「宗易の捉え得たる茶道の精神の説明を具象的ならしめんがために叙述の材料を已むなく物質に借りた爲に危くも土地に住宅に器具の觀察に墮せんとした過程を再び彼の精神の観照に戻さねばならぬ。

海を遮る樹を植えたのも、草茨の小庵を営んだのも、ありふれた器を用いたのも、全て所作を統率するは、たゞの動静を諦視せんがためであつた。彼はあらゆる感覺を止揚して体験の自照のために、更に自照を証して人性の深奥に参せんがために、其の研究室としては、たゞきを以て静寂なる草庵を作つたのであつた。茲に彼は微かなる音にも人性の呼動を聞き、さゝやかなる所作にも人性の姿態を認めて内省に資し、この青光る平和敬虔静肅典雅の間より創生せられる人性の至境に到達して行動の動力を体験せんとした。

この静寂なる内面的より湧き出るものは人を闡發(Quaestio)に虚無(Nihilum)に享樂(Edificationem)に誘ふ魅力をも感して居る。日本文学の内面性の一を示す目標たる『つれづれ』という語の歴史はこの生ける精神の展開を示して居る。その動機には制度より圧せられたる人生の倦怠もあり習性より拘束せられたる人性の呻吟もある。しかしこの苦悩より脱せんがために思わず迷路に立ち入らしめる執拗なる誘惑の跡もこの一語の解剖によりてよく立証し得るのであるが、彼は彼の當時に地上に播曳して居るこの『つれづれ』の間より躍進して、新に行動に結びつく内面的実行性の萌芽を培はんが

ために、自ら箒を採りて落葉に見入り、水を汲みて心頭に注ぎたのである。かくして彼は力を用いずして真なる所作の動力を体験して茶道を打ち建てたのである。故に彼の着眼点は物質よりも所作に、所作よりもこれを統率する内面的実行性(はたらき)に不変なる標準を求めたのであるといつてよい。而してこれを和敬清寂の四字を以て示した。「(石叫ばむ)、六六一六八べ)」

「宗易はその足の踏みどころを殆んど原始的生活のまゝに取り残されたる草茨の陋屋に求めた。花亭の礎の価六十万緡、高倉弟の障子の価二百刀錢と伝えられ、畏くも

残民争採首陽蕨

処々閉却鎖竹扉

詩興險酸春二月 滿城紅綠為誰肥

と謡したまひし世に、彼は矢倉池上の工匠にも優れる雅致を草庵に加え、四条園部大草進士の庖丁にも劣らざる滋味を懷石に施し、相阿弥能阿弥の意匠にも後れざる妙趣を破片にさえ漂わした。彼の茶道の伝統を過れば、有職に詳しくしかも珠光の流を伝へたる宗陳宗悟に師事し、又一休に參せる集雲庵主と交り深く、武人にして遁世後に織田信長の師となれる紹圃あり、能阿弥の指南にして世を遁れたる空海の、台子書院の流を伝へたる隠者道陳あり、恰も寝殿式書院式を統率する有職礼法を体験して、しかも幽谿を辿るが如くに世外の人の胸中にもみ自照されたる人性の妙墨に穿入してこれを平野に通じたようにも見える。かくして彼は偶然にも国民生活史の一高処に立て居るのである。彼の微見した静寂の天地に充溢せる和敬清寂の精神及びそを實現せる行動は生活の原則として見るべく、少なくとも全ての偶然を払い去つて国民生活の必然の法則を、確実に打ち建てたのである。」(「石叫ばむ」、七七―七八べ)

宗易(利休)の庵の生活と精神とが精密に追求され、その境界が解明されている。「国語の力」に、茶道に因んでの記述が見られるのも、その背後に、こうした鋭く深い考究の存したことを考えあわせて、受けとるべきであらう。

右の文章の中にも、「又一休に參せる集雲庵主と交り深く、」とあって、「集雲庵」のことが顔を出していた。「国語の力」においては、その「集雲庵」露地門頭七則が掲げられ、「読むこと」の門頭における至極の銘ともされるに至った。垣内先生は、「『読むこと』を常に謙虚にして儼肅なる求道の精神に充ちたものでありしめることは、自己の自律・理念の制約に依りてのみ可能である。」

(同上「国語の力」、二八三べ)とされるのである。

露地門頭七則の中でも、第六則、賓主歴然の会巧言令色入るべからずが、とりわけ、垣内先生の胸裡に深く刻まれていたかのごとくである。――垣内先生が、「読むこと」のありようとして、「読みものを選択する自己も、説方に於て主張する自己も、目前の自己ではなく、自己の内面に於て自己を否定し、自己を操撕し断乎としてそれを決定し宣言することのできる自己であらねばならぬ。『読むこと』は何人も知り何人も行うことであるが、無限に向上して己まない自己を説む自己に想いいたらば、新たに『読むこと』に就いての驚異を感ぜずには居られないうであらう。無用の思弁に心傲れる自己の心頭に冷水を澆ぎて、澄み切った心の中より輝く光に読むものを照らして、それを讀まねばならぬ。」(同上「国語の力」、二八四―二八五べ)と述べられているのは、かえって、第六則の解釈の一つとも見られるのである。

以上、「国語の力」所収、第五章 国文学の体系 における、

「説む力」のまとめをされるにあたり、利休の茶談および「雲鷹庵」露地門則が引用され、織りこまれていたのを見てきた。垣内松三先生が「石叫ばむ」において、「茶道」（利休を中心とする）に心をひそめられ、造詣を深くされていたことも、見てきたとおりである。「国語の力」にうかがわれる態度・方法の根本は、その「茶道」の考究から導き出されている面の多いことに気づくのである。（昭和四年八月一九六〇秋、清水文雄博士から、芦田恵之助氏が禅に負うところ多いのに対し、垣内松三先生は茶道にその学風の根源を得ていられることのご教示をいただいた。）

さて、垣内松三先生は、「石叫ばむ」所収「草の春」の第八節（おしまいの節）に、「南坊録」の奥書を手がかりとして、つぎのように述べていられる。

「宗易は東山時代に発達せる諸道の先達のように言語を以て道を選んことを避けた。彼の道を言語の上に刻まんとした南坊録の奥書を見ると、敬虔なる宗啓の心と謙肅なる宗易の心と相撃つ精神の律動が聞える。

1 右はこの内御借置きなされ候日記の内より書拔候相違も候はゞ御添削被成下度候（啓）

2 右相違無之候所々口伝にて申す事朱をさし申候（三字不明）
右の会ともは年中に毎会の内品替りたるばかりを御書拔の事、不心得候面上に御思慮可承候くれ、も相替る事なく日々同事ばかりの内心の働きは引替り、何様にも可在候所作飾り置合の珍らしき事は不悦（二字不明）候（易）

3 右覚書心得相違も候はゞ被仰度候御物語承り候度々に書付置候へ共愚僧の得心不成就の故雲泥の事候はん歎殊に書様疎略にて書改候も亦不本意存候故まゝ進上候（啓）

4 右数々の雑談御書留被成候て後悔の事に候併し相違の所存無之候同じくは反古張に被成候へかし（易）

5 右一覽申候さてもまめしく色々の事どもを書き集められ候鷹興雅談とも御記留候はん儀に（二字不明）向後御物語油断申すまじく候大笑々々（易）

6 右台子御伝授の御切紙五十枚半弁中板飾其外十六ヶ条一卷に取集候尤も御相伝の時朱書等仕候まゝ則巻物へ仕立候間御目に懸け候萬一思召所も候はゞ御添削仰ぐ処に候（啓）

7 一巻一覽申候多年の切紙数々御紛失なく御取集の事道に對しての御深切補切り相違候勿論無之候然れども若及他見候へば相伝疎略に成行心外に候まゝ願はくば七花八裂所仰に候併し貴僧の御鍛錬書物不入事に候（易）（引用者注、以上、
○ 園点は垣内松三先生。）

反古張にされ七花八裂されるべき手続は経典の如く厳かに且つ秘して写し伝えられて、この慈愛と厳烈とを兼ね備えた師道と渴仰と敬虔の念に溢るゝ求道の心を今に活かして居る。書院台子を離れて山里の趣きをとり入れた紹興は弘治元年十月二十九日に逝いた。草茨二疊に引き下ろして書院台子より上に高めた宗易は天正十九年二月二十八日、死を賜わり

人生七十 力圃翁咄 吾道宝剣 祝仏共殺

と喝破して利剣を擲った。宗易と談合してこのはかなきさびを道の深にまで透徹せしめ結晶せしめ宗啓は師の歿後、彼の道を見捨て行く多くの門人の間に独り節を守って道を伝えたが、遂に文禄二年三月二十八日に庵を出で、行き方知れずになった。だから草庵では年々十月二十九日に紹鸞忌を、二月二十八日に利休忌を、三月二十八日に宗啓忌を営んで居る。道は絶えた。併しながら真人の心の奥に通える道は絶えぬ。遙か後に井伊直弼は南坊録を説破してこの道を復活したが、彼も亦桜田門外に斃れた。三月三日も草庵に記念するべき日として加えらるべきであらう。今の世に過って婦女の技芸と見下げられて居る茶道は高邁な烈士の凄惨なる伝記の内面にその伝統を続けて居る。道が伝えらるゝ為に遭遇するおしなべての迫害を、間接の動機から道を伝ふる人の上に被って直接に道を破砕して下った。しかしながら道の為に奉仕する至純至高至真の精神は永恒に減びるものでない。雪が融けたら青い芽が出る。」（「石叫ばむ」、八六―九〇頁）

右のうち、「南坊録」の奥昔1・2は、巻二のそれであり、同じく3・4は巻一のそれである。また、5は、巻三のそれであり、6・7は巻五のそれである。2の中に、「三字不明」とあるのは、乍房申候の四字であり、「二字不明」とあるのは、会にての三字である。5は、「さても」の条、「サテモ〜」となっており、「二字不明」とあるのは、不存候ツルの五字である。また同じく5のうち、「座興雅談」は、「座興雅談」となっている。

これらの「南坊録」奥昔に、垣内松三先生は、「敬虔なる宗啓の心と謙爾なる宗易の心と相撃つ精神の律動」を聞いていられる。そこに、「茶道」における宗易の師道と宗啓の求道とを洞察していら

れるのである。

「茶味」の著者奥田正造氏は、「炬辺閑想」において「南坊録」のことにつき、左のように記された。

「南坊録は利休の愛弟宗啓の筆録で、茶道第一の書と称せられてゐるものであるが大正二年某氏からこの書を拜借して書写した。之を書写する労苦は、却て一句一句を味いうる好縁となつた。覚書巻の『茶は第一仏法を以て修行得道することなり、茶をたてて仏に供へ、人にも施し、我を飲むなり』という開示を一層深く感銘するの機会が与えられた。滅後覚書の巻には『作の本意は清淨無垢の仏世界を表し、共に直心の交りなれば、火をおこし湯をわかしか茶を喫するまでのことなり。作法挨拶に拘るゆゑに種々世間の議に随する、趙州を亭主にし初祖大師、を客にして、休居士と此坊が露地の塵を払ふ程ならば一会は調ふべきか』というてゐる。私は南坊録一巻の全精神は実に茲に在ると思う。否、茲を汲み取らねばならぬと思う。」（「炬辺閑想」、昭和15年7月4日、三頁）

ここにも、「南坊録」への深い読みが見られる。――垣内先生の「南坊録」に対する適切な理解も、奥田正造氏のそれと並んで、ほぼ同じ時期になされていたのであつた。この「南坊録」理解ないし研究が「石叫ばむ」の成立ならびに「国語の力」の成立に参与していることを確かめることができる。

なお、「国語の力」成立の契機ともなつた、長野講演「国語教授と国語教育」には、つぎのような一節がある。

「郊外写生を課することも必要な指導の一つであります。私の経験では甚だ困難な作業であります。松本で見ました郊外写生の御

授業は、短い時間でよく統一されたと思いましたが、一般に生徒は、郊外に於ては注意が散漫となり勝つものであります。

利休が門人宗啓の問に答えて『野がけの心がけは草庵に於ける如くせよ』と言ったことが、宗啓の秘録に残って居りますが、野外の点茶に草庵の心持を失わぬということは、余程困難な事であるうと思われまふ。茶碗を運ぶ二尺の間にさえ心の動揺を感じますものが、寥廓たる天地を茶室として三昧の気持に入るのは容易に出来ない事でありましよう。郊外写生の心持は教室の中の心持でいなければなりませんので、その心がまえを導くことは、中々難しい事でありまふが、我々の實際生活に於ては、そうした場合もあり得ることであるのみならず、作文の力の養成にも資することでありまふから、適當の準備の下には、必ず有効な結果を得ることと思ひます。』（有朋堂版「國語の力」、三二一―三二二頁、傍線は引用者。）

垣内先生は、郊外写生の指導のありかたを説くのに、茶道における「野がけ」の心がけを引いていられる。垣内先生の心法として、胸底にしみこんでいた、茶の心を、そこに汲むことができよう。

（昭和42年4月16日稿）（本学教授）